

〔研究ノート〕

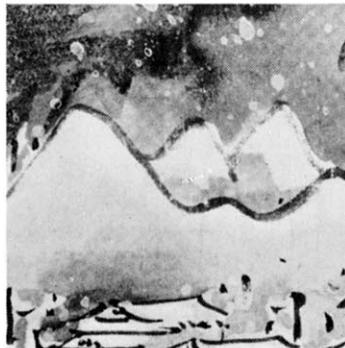
蕪村の線について

—「不用意」の魅力—

これまで七回にわたって、私にとっての蕪村画の魅力ということを書いて来ましたが、その当初から、私にはどうしても書きそびれていたことが一つあります。それはどういうことかと言うと、私がこれまでに挙げたいくつかの観点とは別に、またそういった観点を見出す以前から、それらの絵に共通の、ある名状しがたい魅力が私を捉えていたということです。それがどこから来るものなのか、私には未だにはっきりと判らないのですが、この研究ノートを終えるにあたって、私なりの一応の結論を書いてみたいと思います。

名状しがたいということは論証しかねるということになりましょうから、先ず私の結論を言いますと、その魅力は蕪村の描いた線そのものから発している、ということなのです。私がこれまでに取り挙げた絵について言いますと、蕪村の線は決して立派なものでも巧みなものでもありませんが、それでいて、そこに描き出された画面は私をひきつけて止みません。夜色楼台図のあの山の線にしろ、山野行楽図の中の人物群の線にしろ、一見、行き当たりばつりに無造作にひかれてるように見えますが、決してバラバラには見えず、柔かな纏まりとなって感じられま

夜色楼台図(部分)



す。こうした特色は蕪村の俳画、特に奥の細道図に見ることが出来ます。

こういった線の魅力をどう表わしたら良いのか、私は長い間考えあぐねていましたが、最近ようやく、「不用意の線」と呼んではどうかと考えるに至りました。この「不用意」という語を思い付いたのは、蕪村の文章の中に次のような言葉があったからです。

～前略～いくたびもいくたびも御工案可被成候。李滄溟が詩をねりたる様に有たく候。しかし余り案入(あんじり)候もあしく候。はいかいは間(かん)に髪を入れずと言(いふ)教も有之候。又李白が不用意、まことはいかいは確言にて候。～後略～(青荷子宛手紙)

ここで私が注目するのは、「不用意」が俳諧の確言であるという蕪村の言葉もさりながら、そう言う前に、幾度も幾度も「工案」せよと注意している点です。この手紙では俳句について言っていますが、このことは彼の画歴にもそのままあてはまるのです。蕪村は初めから「不用意」な線を目指したのではなく、実にさまざまな画に倣って、いろいろな線を試みて来ました。その中には非常に緻密な線も謹直な線もあります。蕪村は

山野行楽図屏風(部分)



奥の細道図屏風(部分)

長い間、観点を交え、描法を変えて、晩年まで、自分の本当に納得できる線を探し求めていたと考えられます。そして最後に、あの誰にも真似できない独自の線にたどりついたのです。

蕪村の弟子である呉春にしろ、九老にしろ、金谷にしろ、一寸見れば蕪村の画と見まがうほどの画を描いておられますが、彼等の画は、何点か続けて見ていると飽きが来るとというのが私の感想です。その理由は、彼等が、結果としての蕪村画の面白さをいきなり真似ようとしたことによると思われま

す。蕪村画の多様さを見て来た眼で彼の晩年の絵の線を見ますと、ほかでもあり得たであろうというような、ある種の不確定な感じが常につきまとっています。それでいて、出来上がった画面には、厚みを持った確かな存在感があるのです。ここに、生きるものたゆたいと、魂の姿が感じられて面白のですが、その結果の面白さのみを狙った画からは、生きた感じが薄れてしまい、画面はどこか締りのないものに成ってしまいがちなのであります。このような線による面白さは、まことにあらゆるバランスの上に生まれるもので、少し集中力を欠くと、途端にだらしの



松林富士図(部分)

ない画面になってしまうようです。蕪村自身の画の中にも失敗作が少なからずあるのはこのためです。

このように見ますと、蕪村の線の魅力を、単に「不用意」の魅力というだけでは済まされないこととなります。そこで矛盾した言い方になりますが、いっそ「練れたる不用意」とでも言った方が良いのかも知れません。

蕪村が最終的に自らの絵の中に見出したものは、主題やその表現法、構図や取合せといったものを超えて、線そのもの、筆使いそのものの裡に、自らの美意識を具現させねばならないということだったのではないのでしょうか。人は他人の魅力ある言葉を聞いた時、同じ言葉を使って同じ意味のことを言えば、自分も魅力的に見えるかと錯覚しやすいようですが、人が人を魅する本当の秘密が、その話す内容そのものではなく、それを話すその人の口振り、態度にあるという、ある意味では誰もが日常働かせている感覚を、蕪村は絵を描くことの中に意識的に応用していたのではないのでしょうか。

私にとっての蕪村画の魅力は、ひとえにこの点にあります。

〔了〕

(早川聞多)